# 外来語の表記に関する諸問題

山　名　豊　美

## 0．はじめに

明治期以来，外国の文物とともに多くの言葉が移入され，そのうちのいくつかは消え，またいくつかは外来語として日本語の中に定着してきた。中でも，英語から移入された語彙は年を経るにしたがってその数を増やしている。近年では，コンピューター関連の用語については，メモリー，マウス，クリックなど，そのほとんどが翻訳されることなくそのままカタカナで表記されることが多い。それはそれで時間をかけて翻訳語を考える手間が省け，元になっている英語も憶えられるという利点がある。しかしながら，英語の音声には日本語には存在しないものが数多くあり，カタカナのまま発音しても英語としては通じないことが多い。日本語にない音を含む外来語を表記する工夫としては，violin をヴァイオリンと表すように，[v] の音に対して「ヴ」という表記を与えたり，candy をキャンデーではなくキャンディーと表記したりするなどの例があるが，5母音では表しきれない音をどのように区別し表記するかという根本的な問題が解決されないままになっている。

ここでは，英語をカタカナで表記する場合，現在のやり方ではうまく表記できないか，あいまいさが残る代表的な問題として，発音記号の [æ] で表される音をどのように表記すべきかという問題と，ラ行を使ってあいまいなまま表記をしている [r] と [l]，さらにハ行を使って表される [f] と [h] をどのように区別して表記できるかという問題を取り上げて，どのようにすれば外来語として正確にしかも日本語としても自然に表記ができるかということを考えてみたい。

## 1．[æ] の表記

英語をカタカナで表記する時最も難しいのは母音の表記である。カタカナは表音文字であり，外来語を表記する時は元になった語にもっとも近い音をあてはめるのが基本であるが，英語にはアに近い音だけで「アップル (apple)」，「アート (art)」，「バード (bird)」，「カウ (cow)」，「カット (cut)」のように5つの異なる音があり，それらを5母音体系をもとに作られたカタカナで正確に表記することはとても困難である。それでもいくつかの工夫によって英語の発音に近づけることができる。以下では [æ] の音を例にとって，現在の表記法のどこが問題で，どのようにすれば改善できるかを具体的に考えていきたい。

[æ] の音は bat や cat などの語に含まれる音で，口の開きはアとエの中間である。外来語の表記としては前者は「バット」，後者は「キャット」と表すことが定着しているが，同じ音を表している

という規則性が見られない。後者の表記法で前者を表せば「バット」ではなく「ビャット」にならなければならないし，逆に適用すれば，「キャット」は「カット」でなくてはならない。「カット」ではすでに外来語として定着している cut との区別がつかなくなるという不都合が生じる。そこで but と bat，cut と cat などの違いを的確に表せる表記法が必要になってくる。

cat を「キャット」，cancel を「キャンセル」と表記すること自体は発音の類似性という観点からは妥当な表記と言えるのだが，問題は全ての語で同じ方法をとることができないことにある。例えば，apple は「アップル」と表記されるが，[æ] の音をアで表記するのがいかに不満足であってもキャットの場合と同じようには表記できない。アをヤに換えるという規則を当てはめれば「ヤップル」か「イャップル」という表記が考えられるが y で始まる語との区別がつかないという欠点が生じてくる。そこで，もう一度アとエの中間であるという発音上の特徴を考慮すると，「エァップル」もしくは「アェップル」という表記が最も妥当性が高いように思われる。新たに考えられる2つの方式を仮にA，Bと名づけ，現在使われている幾つかの外来語に当てはめてみると次のようになる。（表1）

表1

| | 現　行 | A方式 | B方式 |
|---|---|---|---|
| apple | アップル | エァップル | アェップル |
| bat | バット | ベァット | バェット |
| cancel | キャンセル | ケァンセル | カェンセル |
| captain | キャプテン | ケァプテン | カェプテン |
| cat | キャット | ケァット | カェット |
| taxi | タクシー | テァクシー | タェクシー |

現行の表記と比べるとA，Bどちらの表記法でも多少不自然さが感じられるかもしれないが，少なくとも英語における [æ] の音をより原音に近く，しかも規則的に，表記できているという点では現行のものよりも優れていると言える。問題は最初の2文字で表された部分を1つの音節を表す表記として認識できるかということであるが，tea を「ティー」，two を「トゥー」などと表記することが一般的に受け入れられていることを考えれば，このような表記法が日本語の中で例外的に特殊なものにはならないと思われる。さらに「アップル」や「バット」などではアクセントを保持するために不可欠であった「ッ」の表記も発音上なくてもよくなるので「エァプル」あるいは「アェプル」，「ベァト」あるいは「バェト」といった表記の方がより自然に感じられるかもしれない。いずれにしても，わずかな工夫で規則的に表記できることのメリットは大きく，最初のうちは違和感を覚えても，定着することでその便利さに気が付くのではないだろうか。

## 2．[ l ] と [ r ] の表記

カタカナで外来語を表記する中で最も大きな障害の一つが [l] と [r] の混同である。どちらも

ラ行の音で表されるだけで統一的に区別する方法がいまのところ存在しない。入門用の英和辞書のカタカナによる発音表記の例では，便宜的にカタカナとひらがなを使い分けることで区別している例も見られるが，それでは原則的にカタカナで表記しなくてはならない外来語の表記には使うことができない。ここでも原語の発音に基づいた統一的な表記法が求められている。

英語の発音をカタカナ表記する場合，よく言われることの一つに，r音が実際にはラ行よりもワ行の発音に近いというものがある。例えば，right は「ライト」ではなく「ワイト」，rain は「レイン」ではなくて「ウェイン」と発音した方が英語らしい発音になるというものである。たしかに標準的な英語のr音は舌先が口蓋に触れることなく，また，唇をまるめて発音されるので，結果的にw音との差が極めて小さくなっている。しかしながら，聞こえ方が近いというだけで，「ワイト」や「ウェイン」といった表記を採用すれば，w音との区別ができなくなってしまい，合理的な表記とは言えない。

結論的に言えば，r音はラ行を使って表記し，発音上の特徴は標準英語特有のものとして，頭にいれておけばよいのではないだろうか。実際，フランス語やドイツ語など英語以外の言語には，それぞれ特徴的なr音が存在し，どのような発音であっても，結局のところ，rの異音として認めることができる。日本語のラ行の発音も，英語やフランス語などとは異なっていても，r音の異音の一つであることには違いなく，その限りにおいて，英語のr音の表記としてラ行音を用いることに問題はないと言える。

rの表記をこれまで通りラ行を用いることにして，その次に解決すべき問題として［l］の音をどのように表すべきかということが出てくる。right を「ライト」と表記するのに対して，light はどのように表記すべきかという問題である。これまで繰り返し述べてきたように，合理的で適切な表記は原音を基にして規則的に表されるものでなくてはならない。そこでまず考慮しなくてはならないのは英語の［l］がどのように発音されるかということである。英語の［l］を発音するには舌先を強く口蓋に当て，息を舌の両脇から出さなくてはならない。その結果，耳で聞いた場合，［r］の音よりも強くはっきり聞こえる性質がある。そういった特徴を考慮し，r音との対比を明確に表すことができる表記法として，「ル」を［l］の音に対応させ，その後に小文字で母音を付加する方法が考えられる。例えば，light に対して，「ルァイト」という表記を与えるのである。また別の方法として，ラ行の文字の後に小文字で母音を付加するという方法も考えられる。2つの方式をそれぞれA，Bと名づけ，現在使われている外来語がどのように表されるかということを表にすると次のようになる。（表2）

表2

| | 現　行 | A方式 | B方式 |
|---|---|---|---|
| light | ライト | ルァイト | ラァイト |
| leader | リーダー | ルィーダー | リィーダー |
| loop | ループ | ルゥープ | ルゥープ |
| lemon | レモン | ルェモン | レェモン |
| long | ロング | ルォング | ロォング |

ここでもまた現行の表記に比べて不自然さが感じられるかもしれないが，通常のラ行で表されるｒ音とは異なる音を規則的に表すことができるという点で，Ａの方式は優れている。Ａの表記に違和感がある場合にはＢの表記を用いることで多少緩和されるかもしれない。さらに land のように［æ］の音を含む語の場合は，「ルァンド」もしくは「ラァンド」の代わりに「レァンド」のような表記が可能になる。いずれにせよ，ラ行と小文字が組み合わされて用いられた時は［l］の音を含む語を表すという規則が成り立つのである。

## ３．［f］の表記

英語をはじめ，多くの言語で用いられていながら，日本語には存在しない音にｆ音がある。この場合，日本語の中で類似している音はハ行の音になるが，ｒとｌの場合と違い，すでに，ある程度区別する方法が確立している。例えば，fight に対して「ファイト」，fence に対して「フェンス」という記述が一般化している。前節で light に対して「ルァイト」，leader に対して「ルィーダー」という表記が妥当であると主張したことがf音の場合ではすでに定着しているのである。ここでは「フ」がｆ音を表し，小文字で母音が表されている。ただし，food に対しては「フード」という表記が一般的なので，ここでは規則性が保たれる「フゥード」という表記法を新たに提案したい。これらを表にまとめると次のようになる。（表３）

表３

| | 現　行 | 改善案 |
|---|---|---|
| fight | ファイト | 現行のまま |
| finger | フィンガー | 現行のまま |
| food | フード | フゥード |
| fence | フェンス | 現行のまま |
| fork | フォーク | 現行のまま |

ここで重要なのは，ｆ音の表記を「フ」と母音字の組み合わせに限定することによって，「フ」が単独で用いられた場合はｈ音を表すことが分かるということである。これによって，今まで，「フード」と表記されたものが food なのか hood なのか分からなかったものが，hood のみを表すことになる。頭巾の意味の hood や物を掛けるための hook は今まで通り「フード」や「フック」と記述していればｈ音で発音される語であることが自動的に分かるのである。

これはラ行が単独で使われている時はr音を表すのと全く同じであり，その場合「ルート」とあれば root もしくは route に対する表記であるということになる。

以上見てきたように，ｆ音の場合すでに定着している表記法をごくわずか修正するだけでよく，そのことから逆に，ｌ音の場合も同じような表記法を定着させることが可能であると考えられるのである。

## 4．まとめ

現代の日本語は，外来語をカタカナで表記することによって，大量の語彙をすばやく取り入れることを可能にしてきた。しかしながら，英語のように日本語にはない音を多く持つ言語から語彙を移入する場合，カタカナ表記は不完全でしばしば混乱を招く要因になる。これまでにもカタカナ表記の不完全さを補う工夫が幾つかなされてはきたが，部分的なものに留まり，全体的な表記体系を改善するという試みは，ここ最近ではあまりなされていないように思われる。本稿では，日本語に存在しない音で，カタカナで表記することが困難である［æ］と［l］と［f］の音を含む語について，どのような表記が最も自然で合理的かといいうことを論じてきた。インターネットなどの発達により，これからさらに科学技術をはじめとするあらゆる分野の語彙が日本語の中に大量に流れ込んでくるだろう。それらの語を整然と規則的に表記できるかできないかということは日本語の将来にとって決して軽視すべきではない問題であると確信するものである。

（やまな・とよみ　社会福祉学科）

### 参考文献

Gimson, A. C. 1980. An introduction to the pronunciation of English. London: Edward Arnold.
枡矢好弘　1976.『英語音声学』こびあん書房.
寺島隆吉　2000.『英語にとって「音声」とは何か？』あすなろ社.
楳垣実　1961.『日英比較語学入門』大修館.

# On Representation of Borrowed Words in Japanese

Toyomi Yamana

Since Meiji Era many foreign words have been introduced in Japanese. Most of them are represented in 'Katakana (Japanese alphabet)'. Using 'katakana' is a convenient way to import foreign words into Japanese but some of the sounds in foreign languages are difficult to represent correctly. Among them 'a' sound as in apple and the difference between 'r' and 'l' are most difficult in representing in Japanese. In this paper we propose a new way of representing those sounds in Japanese. By using the new method we can represent foreign words more systematically and then we can imagine the original word more easily. Although there are many problems still unsolved, it is clear we should take a serious consideration about the systematic representation of foreign words for the development of our language.

Key Word: borrowed word, representation, Japanese